

1980年代アメリカ図書館における児童サービスと社会的背景

米田 佳乃子

図書館では、既存のサービスに加えて常に時代のニーズに合わせたサービスが提供される。さらに、公共機関である公共図書館では社会的動向も大きく反映される。社会的動向と地域住民のニーズは、図書館サービスを変化させる大きな要素となる。公共図書館利用者の中でも、特に児童のニーズを的確に把握することは困難である。そこで、児童サービスを構成するにあたって、図書館員は児童の行動を観察することによって推察される、児童自身のニーズを踏まえる必要がある。しかしこの推察は、その時代の教育に対する考えや育児に対する考えなどの社会状況に左右されると考えられる。そこで、本研究では社会的動向に影響を受ける児童サービスに焦点を絞り、社会的な要因と図書館サービスにどのような関連があるかを調査する。具体的には、保守政権によって公共事業が縮小したレーガン政権時代のアメリカ図書館を調査対象とする。時代背景を視野に入れながら、図書館における児童サービスを照らし合わせて調査し、図書館がどのように時代のニーズに応えていたのかを明らかにする。

本研究では、1980年代に実施されていた児童サービスおよび関連する社会情勢を対象として、文献調査を行った。1980年代に出版された *Library Journal* および *ALA Yearbook* を用いて、当時の児童サービスの動向を調査した。

本研究を通じて、レーガン政権下の児童サービスは、児童サービスの有用性を主張しながら、社会のニーズに応えようとしていたことが明らかになった。利用者のニーズの増加と図書館予算の減少の不均衡を正すために、図書館界は社会、政治家、外部機関からの支援を獲得しようと積極的に活動した。そこで獲得した支援を活用して、移民支援、貧困家庭支援、鍵っ子プログラムなどの社会的問題を抱えた児童への支援や、児童虐待や誘拐を警戒した安全指導などが実施された。一方、検閲の脅威に対して児童サービスは抵抗を示し、図書館の情報アクセスに関わる理念に反する動きに対しては徹底的に抵抗した。

本研究は、今後児童サービスを構成するうえで社会のニーズに応える重要性を高めるものとなる。ただし、本研究では児童サービスの中でも、当時導入されはじめたコンピュータの利用やメディアの活用については調査の範囲外となっている。今後は、児童サービスの機械技術の活用やメディアの活用の可能性を探るため、調査対象となる記事を増やし、児童サービスのより詳しい分析を行っていくことが望ましい。また、児童サービスに焦点を当てたため、登場したばかりのヤングアダルトサービスについて調査が及ばなかった。ドラッグや非行が注目された当時のヤングアダルトサービスについて、更なる分析が必要である。

(指導教員 吉田右子)